

【セッションNo. 4】

Delphi/400 テクニック公開

# Windows7に最適化した アプリ開発・運用テクニック

株式会社ミガロ.

システム事業部 プロジェクト推進室

尾崎 浩司

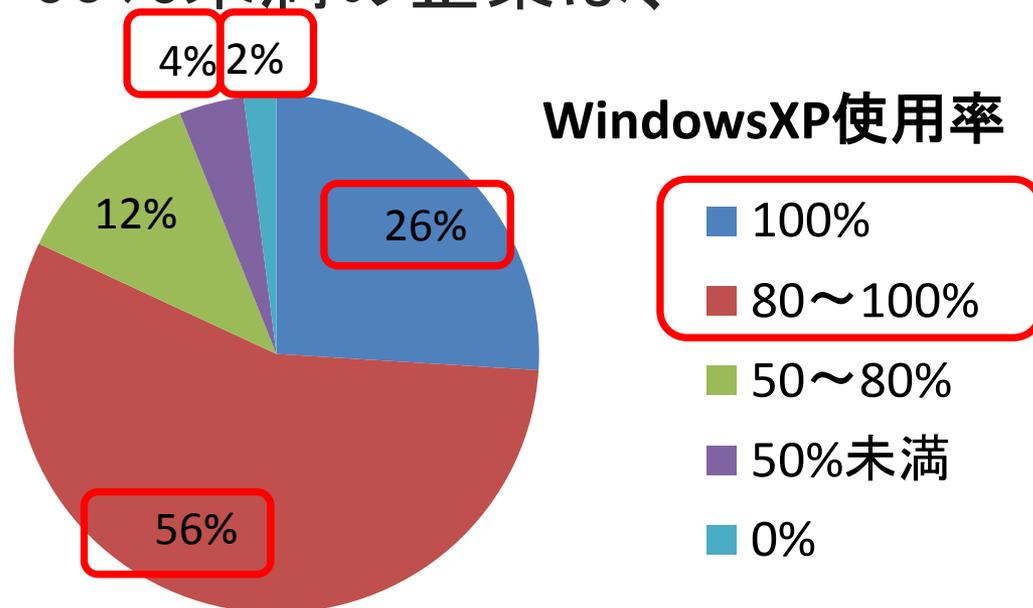
## 【アジェンダ】

1. はじめに
2. Windows7は、ここが変わった！
3. Windows7に対応させる開発ノウハウ
4. Windows7対応版Delphi/400 versionXEを使用するメリット
5. まとめ

# 1. はじめに

## ■ 企業におけるWindowsXP利用状況

- 企業ユーザーの**約82%**が未だにWindowsXPをメインに使用
- WindowsXP使用率が50%未満の企業は、**わずか約6%**



社団法人日本情報システム・ユーザー協会 (JUAS)  
「企業のIT投資動向に関する調査研究」(企業IT動向調査2011)より

## ■ Windows7導入状況

- 2012年度迄に**約75%**の企業が導入を開始
  - 2014年4月にWindowsXPのサポートが遂に終了

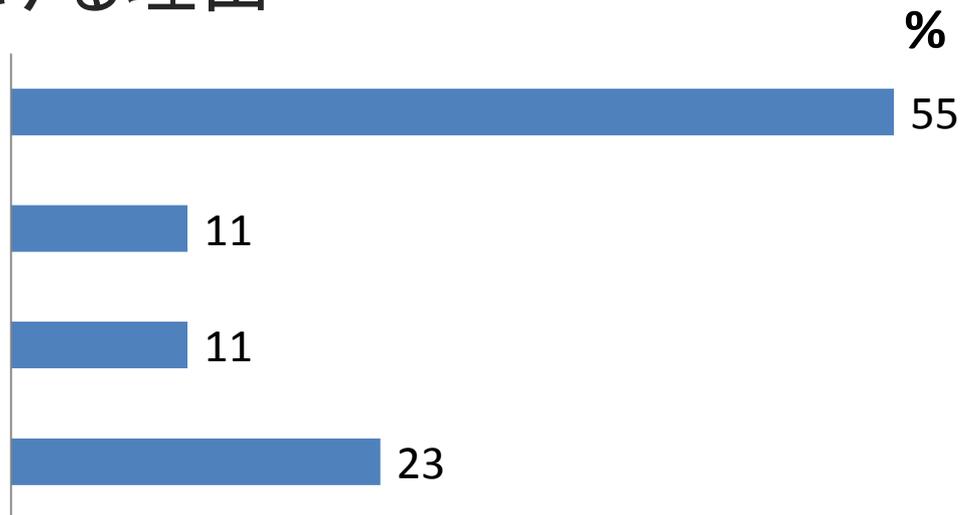
### ● WindowsXPを使い続ける理由

業務アプリケーションの互換性に問題

導入費用が高い

現状のOSで不満がない

その他



社団法人日本情報システム・ユーザー協会 (JUAS)  
「企業のIT投資動向に関する調査研究」(企業IT動向調査2011)より

## ■ Delphi/400のWindows7対応

- Version2010にて正式対応

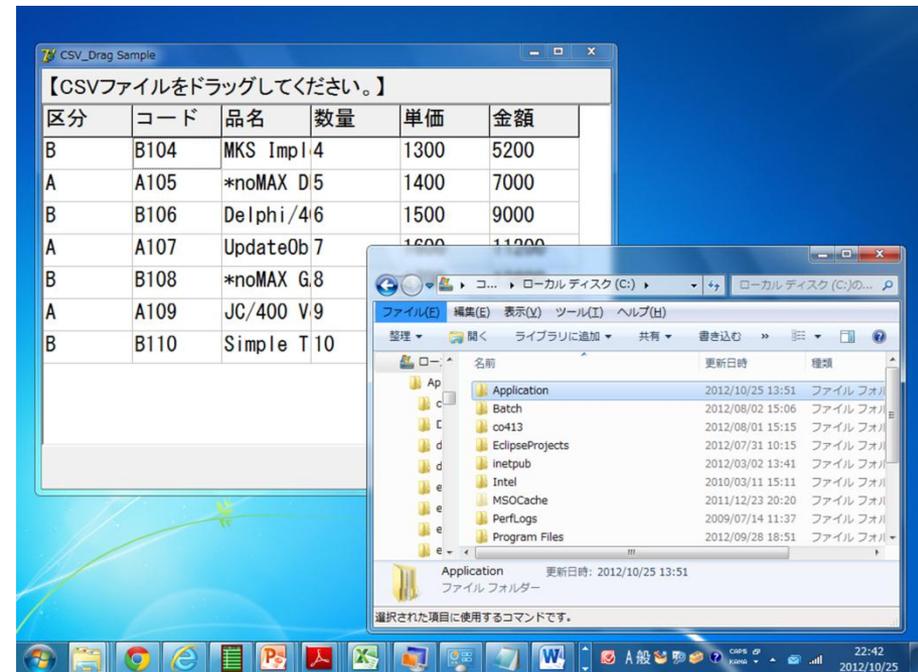
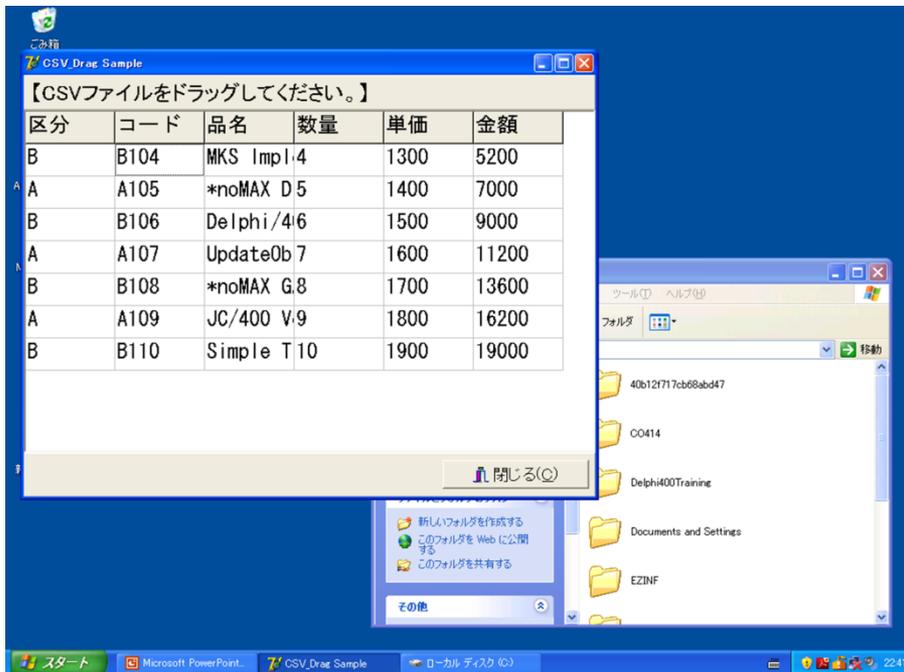
Delphiバージョン		7	2005	2006	2007	2009	2010	XE
動作環境	Windows3.1	-	-	-	-	-	-	-
	WindowsNT3.51	-	-	-	-	-	-	-
	Windows95	-	-	-	-	-	-	-
	WindowsNT4	-	-	-	-	-	-	-
	Windows98	○	-	-	-	-	-	-
	WindowsMe	-	-	-	-	-	-	-
	Windows2000	○	○	○	○	○	○	○
	WindowsXP	○	○	○	○	○	○	○
	WindowsServer2003	-	○	○	○	○	○	○
	WindowsServer2008	-	-	-	-	○	○	○
	Windows Vista	-	-	-	○	○	○	○
	Windows 7	-	-	-	-	-	○	○

- 旧バージョンであっても、Windows7動作保証は無いが、アプリケーションを稼働させることは可能！
  - 但し、注意しなければいけない点もある
  - 今回はWindows7で使用する際のノウハウを紹介

## 2. Windows7は、ここが変わった！

# ■ WindowsXP と Windows 7

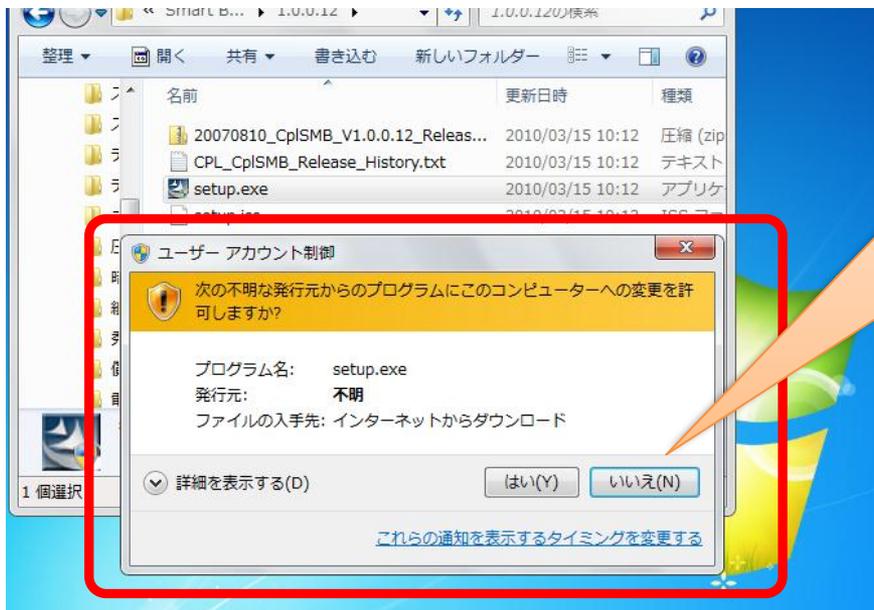
- 画面は、繊細なアニメーションと半透明のガラスウィンドウが特徴のAero対応により見た目のイメージは異なるが、基本的にDelphi/400で作成されたWin32アプリケーションはそのまま実行可能。



# ■ Windows7はここが変わった①

## ● UAC(User Account Control)

- 管理者権限(Administratorsグループ)のユーザーでも、通常は一般ユーザーと同じ権限レベルとなり、権限がないとできない操作は必ず確認画面がでてくる。



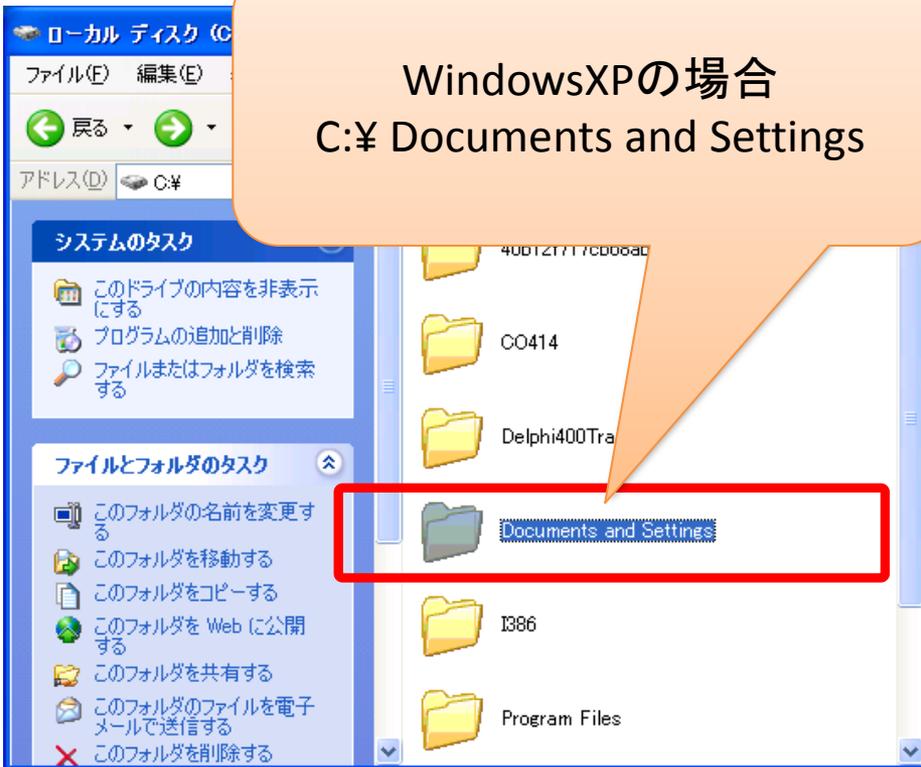
プログラムのインストール等システム設定を変えるような物は、管理者権限でログインしていても、変更を許可しない限り実行不可。

## ■ Windows7はここが変わった②

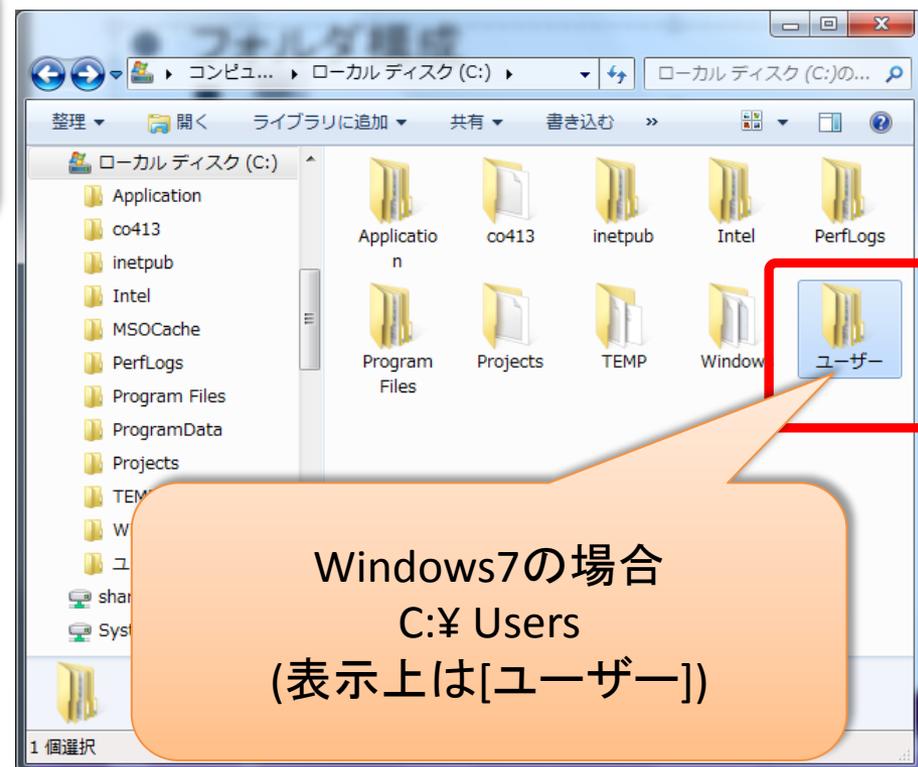
### ● フォルダ構成

- ユーザーの個人情報が格納されるフォルダが、WindowsXPとWindows7とは場所が異なる。

WindowsXPの場合  
C:¥ Documents and Settings



Windows7の場合  
C:¥ Users  
(表示上は[ユーザー])



## ■ Windows7はここが変わった③

### ● タスクバー

- Windows7では、アプリケーション毎にアイコン表示されタスクがまとまるため、把握しやすい。



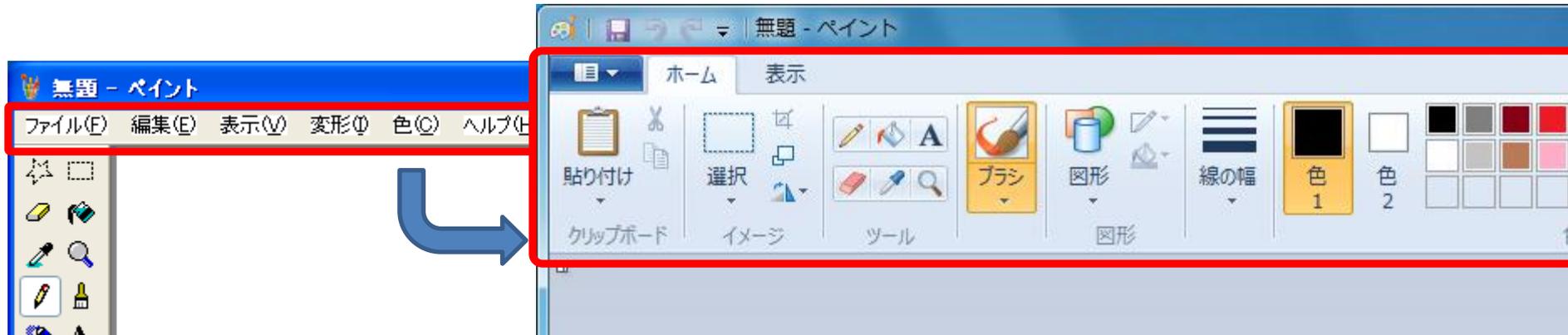
## ■ Windows7はここが変わった④

### ● ジェスチャー/マルチタッチ

- 従来は、基本的なタッチ操作(クリック)のみ
- フリック動作やマルチタッチがOSレベルで可能に

### ● リボン

- 従来のメニューバーの代替。
- Office2007で初採用。Windows7からはOS付属アプリケーションでも使用。(例:ペイント)



### 3. Windows7に対応させる開発ノウハウ

# (1) UAC対応

# ■ アプリケーションの設定情報

## ● アプリケーション固有の設定情報を保持するには？

### ■ DB

行	キー・フィールド	サブ・システムID	データ
000001	CDCADR1	CD	港区東麻布台3-5-1
000002	CDCADR2	CD	東麻布台ビル
000003	CDCFAX	CD	03-322X-071X
000004	CDCNAME	CD	株式会社 東麻布台コーポレーション
000005	CDCNAMEK	CD	ヒカシアソフトウェアコーポレーション

### ■ レジストリ

名前	種類	データ
ab) (既定)	REG_SZ	(値の設定なし)
ab) Height	REG_SZ	245
ab) Left	REG_SZ	372
ab) Top	REG_SZ	168
ab) Width	REG_SZ	200

### ■ INIファイル

```
[Setting]
Top=201
Left=182
Width=789
Height=509
```

## ■ INIファイルの使用例

- アプリケーション終了時に、フォームの位置・サイズをINIファイルに書き出す

```
procedure TForm1.FormDestroy(Sender: TObject);
var
  sPath: String;      // Path
  iniFile: TIniFile; // INI情報
begin
  //アプリケーションファイルPath取得
  sPath := ExtractFilePath(Application.ExeName);
  //INIファイルアクセスオブジェクト生成
  iniFile := TIniFile.Create(sPath + 'Sample.ini');
  try
    //INIファイルにフォームの位置サイズを保存
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Top', Self.Top);
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Left', Self.Left);
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Width', Self.Width);
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Height', Self.Height);
  finally
    //INIファイルアクセスオブジェクト破棄
    iniFile.Free;
  end;
end;
```

Exeファイルが実行されている  
Pathを取得

取得Path名 + Sample.iniに  
アクセス

INIファイルに情報書込み

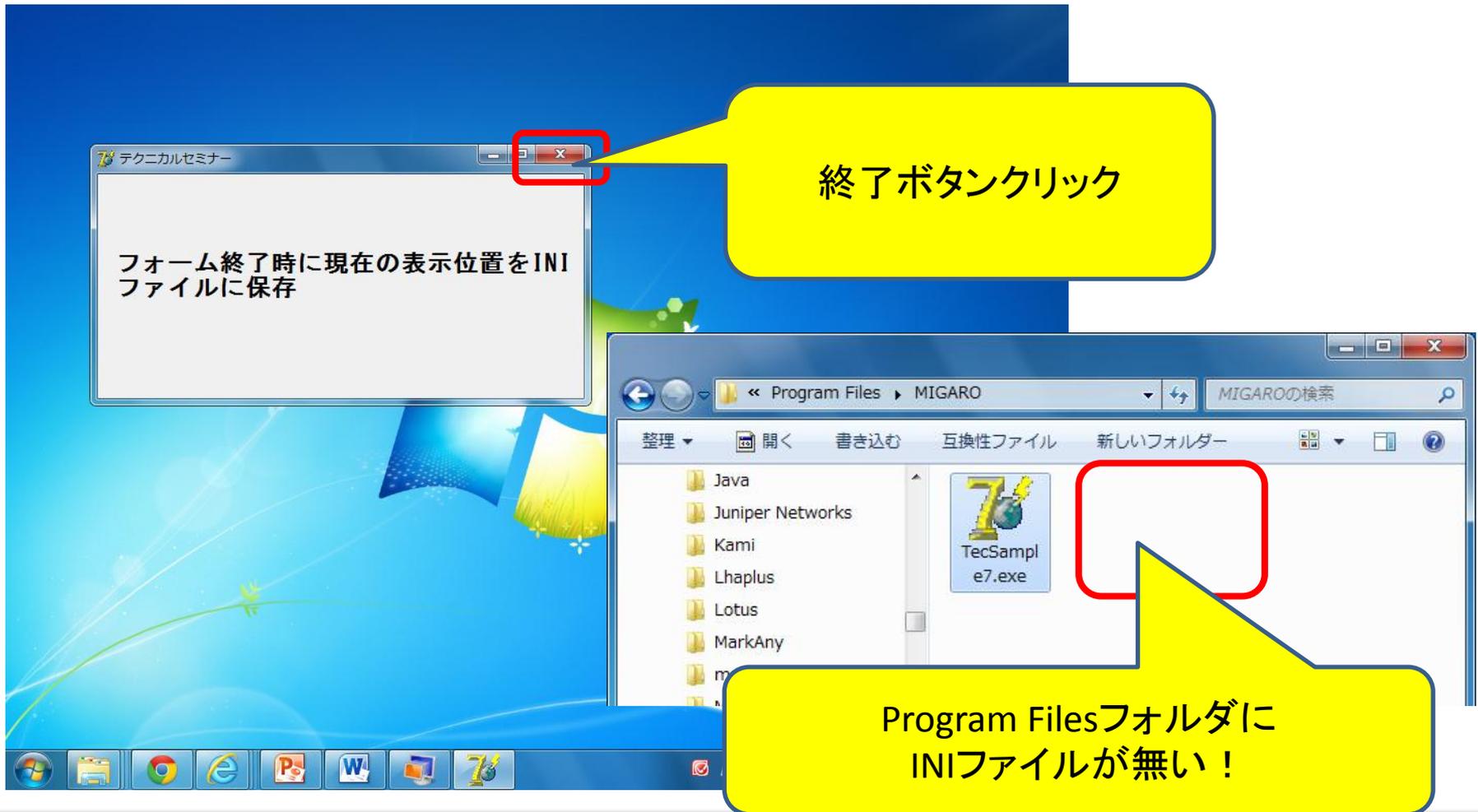
# ■ 実行イメージ (WindowsXP : Delphi/400 ver.7)

- C:¥Program Files¥MIGARO¥TecSample7.exe



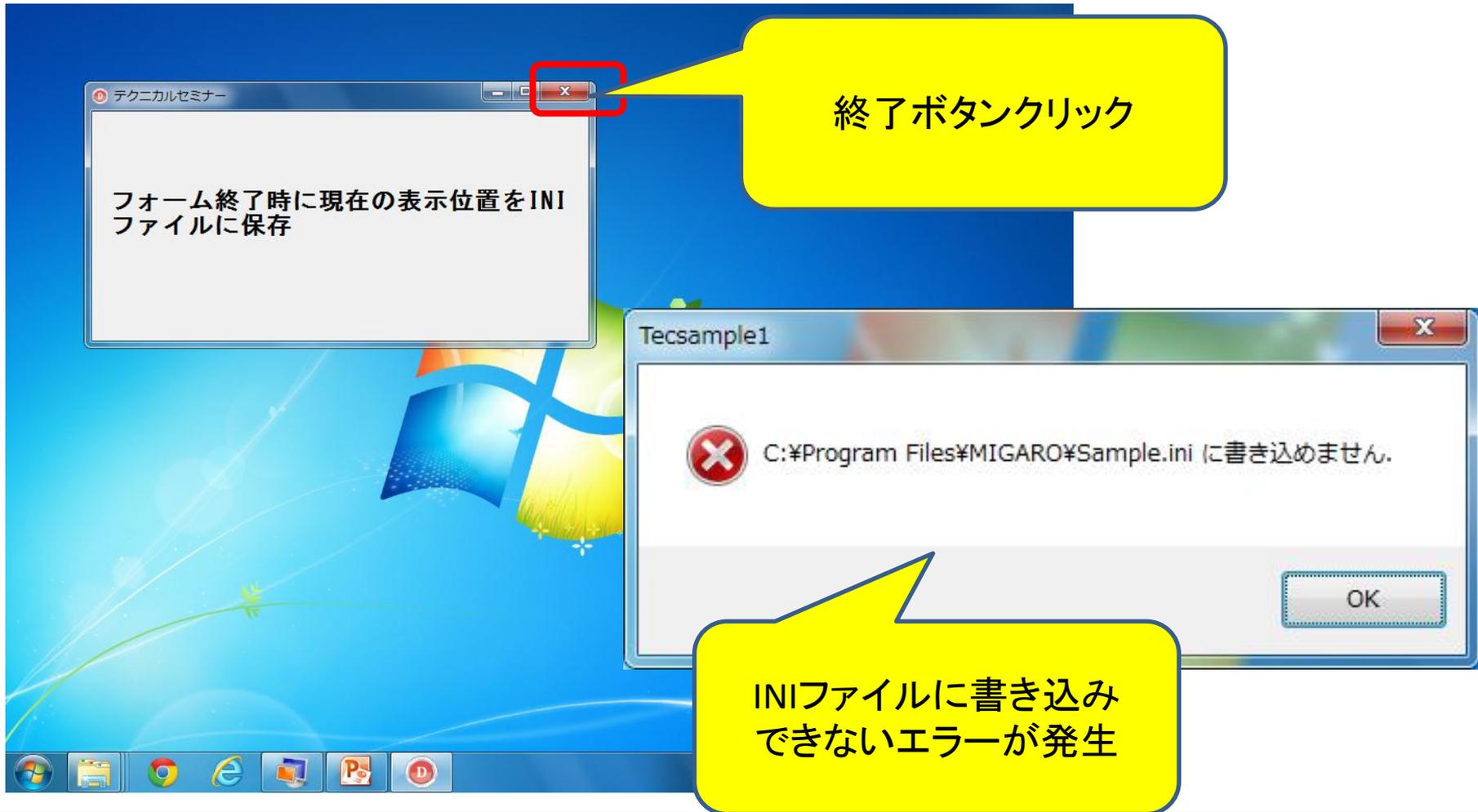
## ■ 実行イメージ (Windows7 : Delphi/400 ver.7)

- C:¥Program Files¥MIGARO¥TecSample7.exe



## ■ 実行イメージ (Windows7: Delphi/400 ver.XE)

- C:¥Program Files¥MIGARO¥TecSample1.exe



## ■ UAC(User Account Control)

- Windows7でUACが有効な場合、管理者権限ユーザーでも通常は一般権限しか有しない。
- 下記に対する書き込みは、都度管理者権限を取得しないと不可。
  - Cドライブ直下
  - フォルダ
    - Program Files フォルダ
    - Windows フォルダ
    - System32 フォルダ
  - レジストリ
    - HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SoftWare キー

## ■ 旧バージョンで作成されたExe

- Delphi/400 ver.7でコンパイルされたExeは、エラーが発生しない。
- しかし、生成されたはずのINIファイルが無い。



- 旧バージョンで作成されたExeの場合、内部に権限に関する情報を持っていない。
- 権限情報が無いExeをWindows7で実行すると、互換性の為に仮想化が適用される。

## ■ 旧バージョンで作成されたExe

「互換性ファイル」をクリック

C:¥Users¥(ユーザー名)¥AppData¥Local¥VirtualStore¥  
Program Files¥MIGARO¥  
にINIファイルが保存されている

## ■ 互換性ファイル(VirtualStore)

Delphi/400アプリケーション



書込み

C:¥Program Files¥



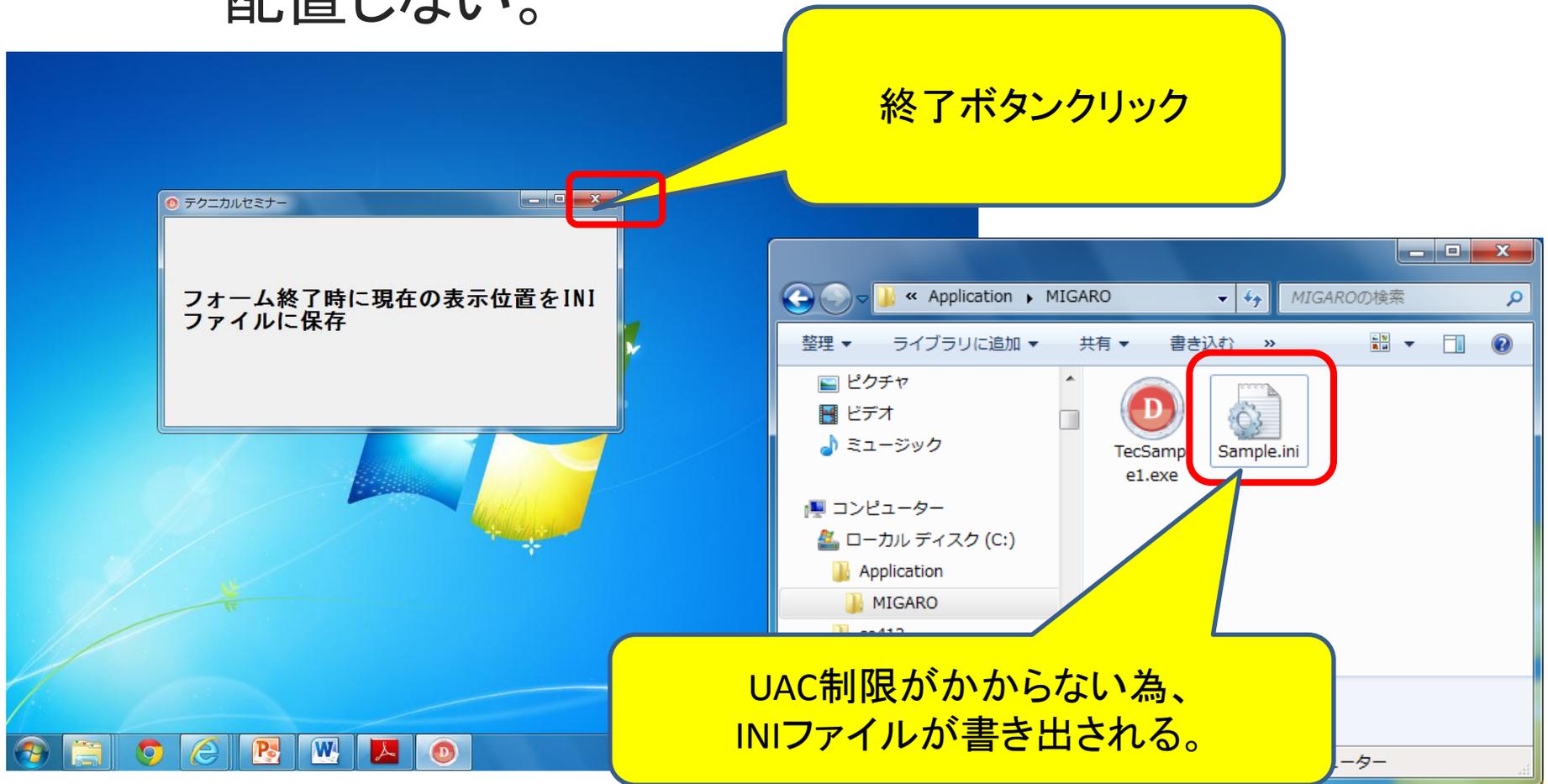
アプリケーションからは、  
Program Filesのフォルダに  
書き込んだように見えるが、  
実際は、Virtual Store  
フォルダへリダイレクト  
されている。

C:¥Users¥(ユーザー名)  
¥AppData¥Local¥VirtualStore  
¥Program Files¥

- 一見便利そうだが、互換性ファイルは  
ユーザー毎の登録となる為トラブルの元！

## ■ UAC 対応①

- アプリケーションをUAC対象となるフォルダに配置しない。



## ■ UAC 対応②

- INIファイルの書き込み先をユーザーフォルダに変更する。

```
procedure TForm1.FormDestroy(Sender: TObject);
var
  sPath: String;      // Path
  iniFile: TIniFile;  // INI情報
begin
  //保存先にパブリックドキュメントフォルダを指定
  sPath := 'C:\Users\Public\Documents';
  //INIファイルアクセスオブジェクト生成
  iniFile := TIniFile.Create(sPath + 'Sample.ini');
  try
    //INIファイルにフォームの位置サイズを保存
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Top', Self.Top);
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Left', Self.Left);
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Width', Self.Width);
    iniFile.WriteInteger('Setting', 'Height', Self.Height);
  finally
    //INIファイルアクセスオブジェクト破棄
    iniFile.Free;
  end;
end;
```

全てのユーザーが使用できる  
パブリックフォルダを指定  
(パブリックドキュメント)

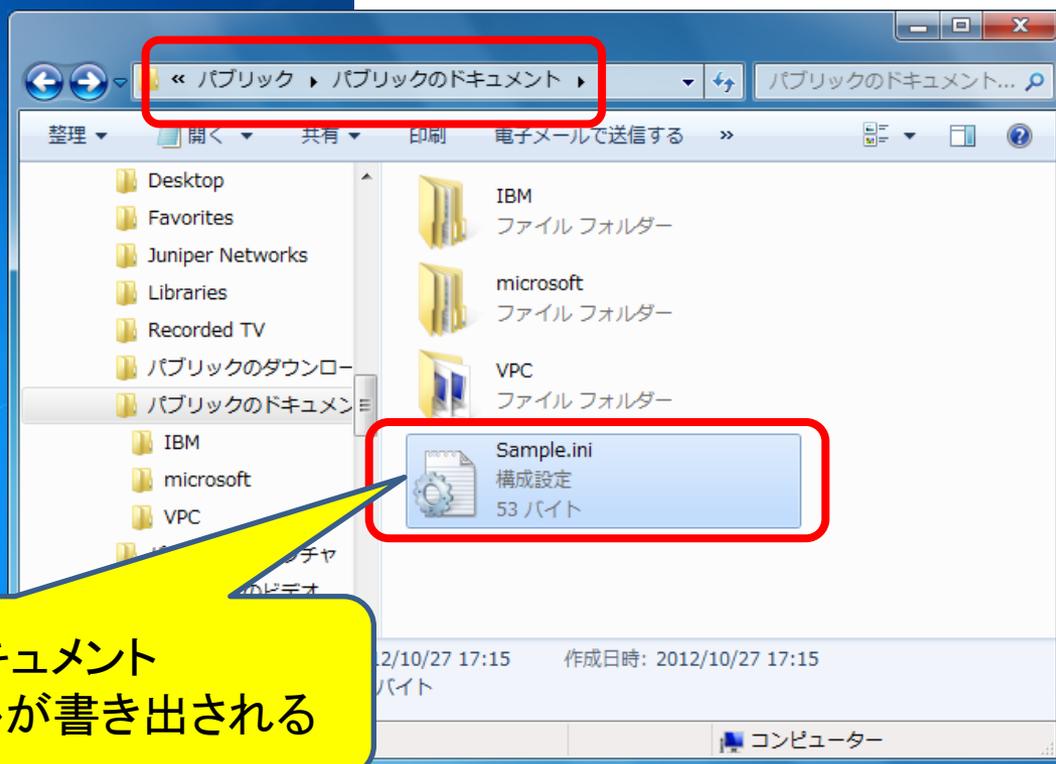
## ■ UAC 対応②

- INIファイルの書き込み先をユーザーフォルダに変更する。

終了ボタンクリック

テクニカルセミナー

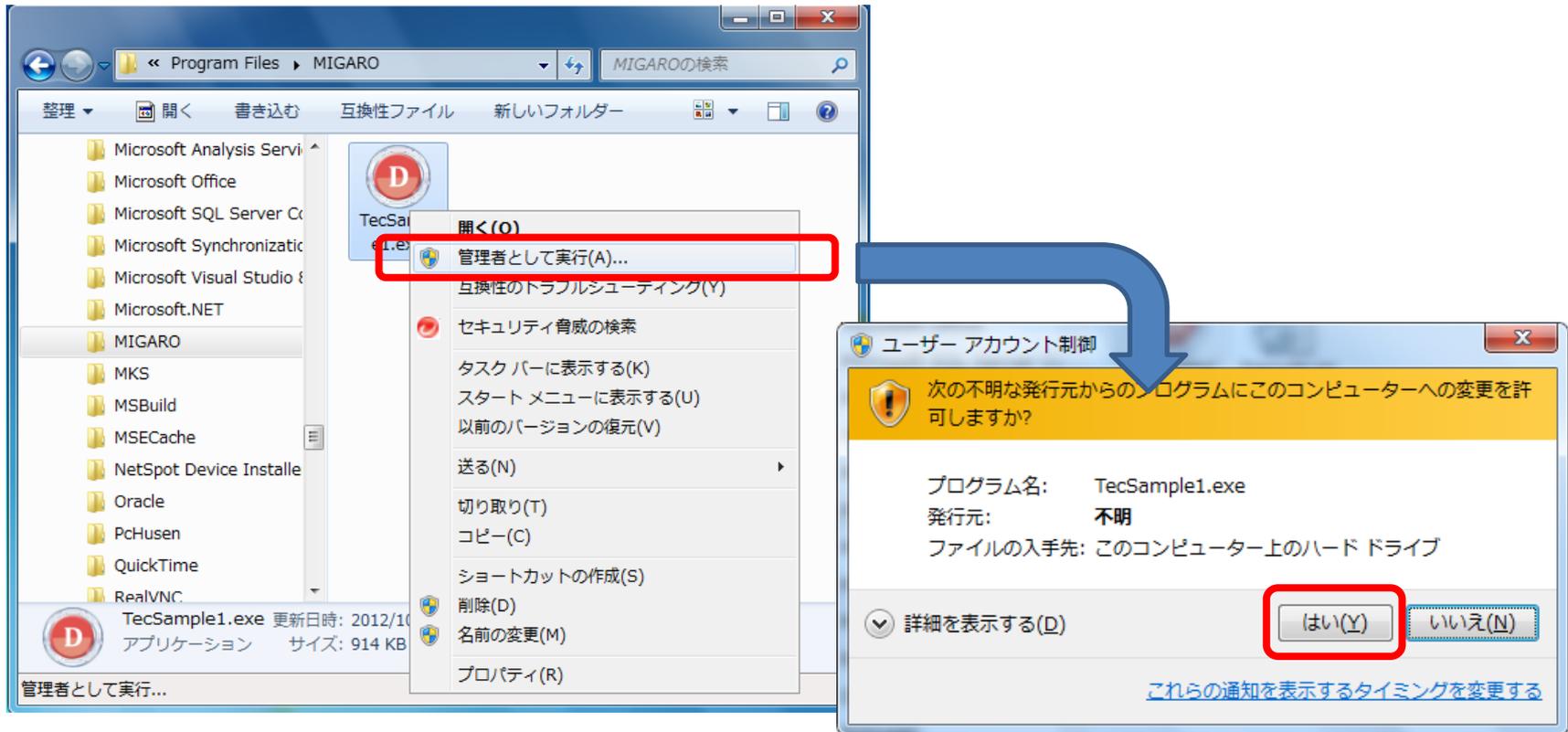
フォーム終了時に現在の表示位置をINI  
ファイルに保存



パブリックドキュメント  
フォルダにINIファイルが書き出される

## ■ UAC 対応③

- アプリケーションを管理者に昇格して実行する。



- 明示的に「管理者として実行」を指示しないといけないか？

## ■ Delphi/400 ver.XE で作成されたExe

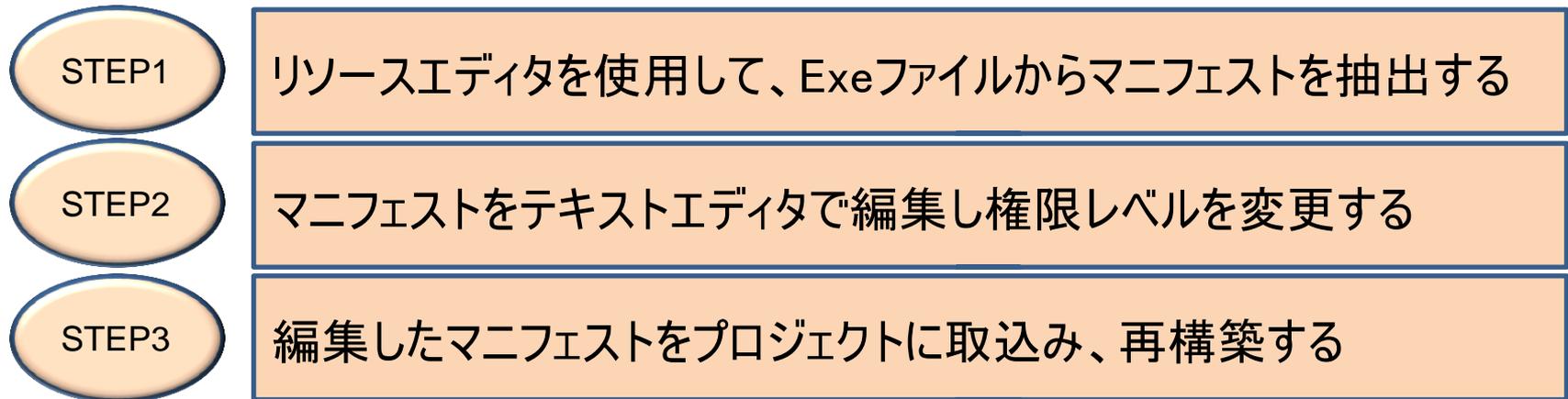
- アプリケーションの実行権限レベルを宣言した情報がExeに含まれる(マニフェスト)
- レベルは、”asInvoker”が設定されている

レベル	概要
asInvoker (デフォルト)	アプリケーションは、アプリケーションを開始したプロセスと同じアクセス許可で実行される。 [管理者として実行]を選択すると、アプリケーションをより高いアクセス許可に昇格させることが可能。
highestAvailable	アプリケーションは、可能な限り高いアクセス許可レベルで実行される。 使用可能な最も高いアクセス許可レベルが、開始したプロセスのレベルより高い場合は、資格情報の入力が必要。
requireAdministrator	アプリケーションは管理者のアクセス許可で実行される。 アプリケーションを開始するユーザーは、管理者グループのメンバーである必要がある。 開始したプロセスが管理者のアクセス許可で実行されない場合は、資格情報の入力が必要。

## ■ 実行権限レベル変更 (Delphi/400 ver.XE)

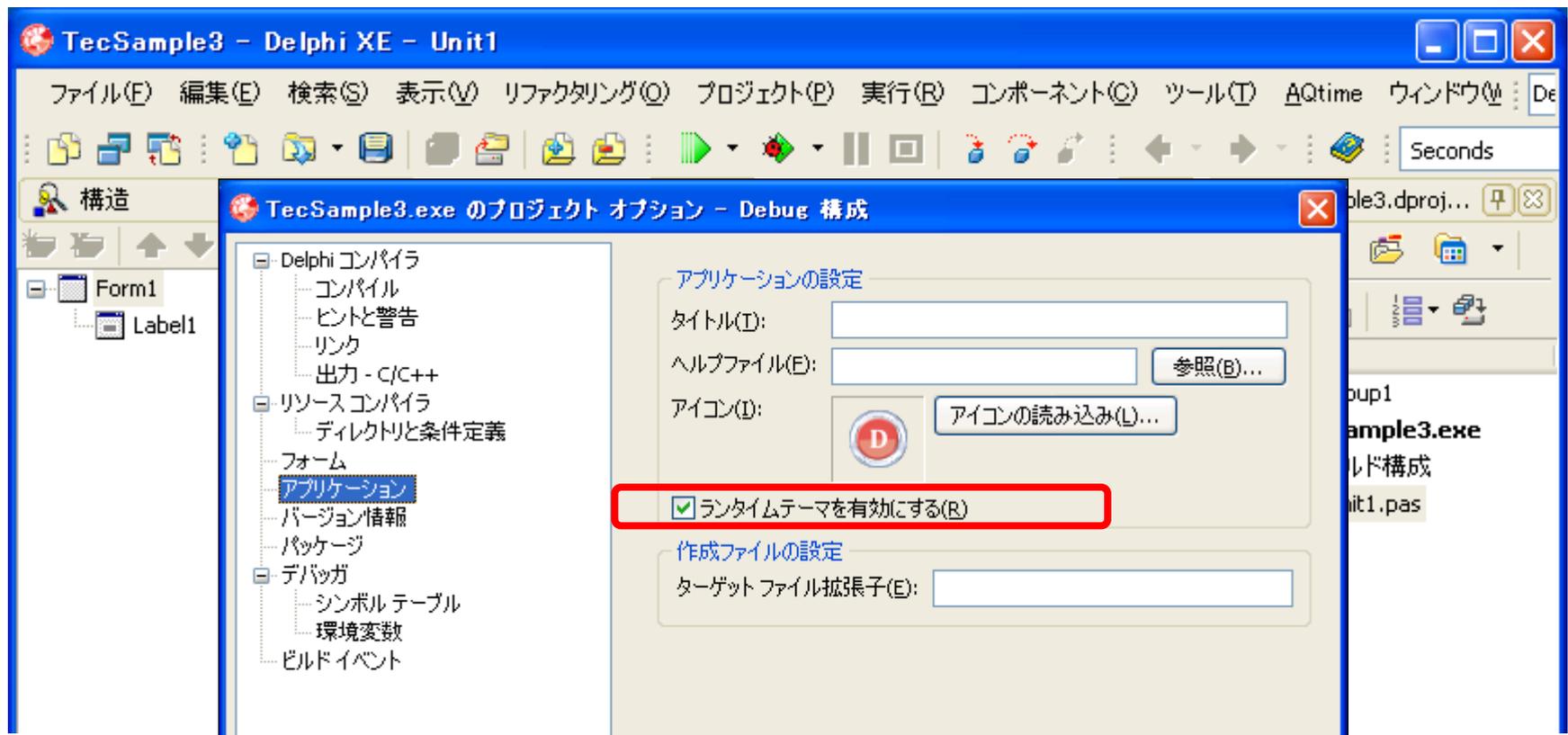
- 権限レベルを**requireAdministrator**へ変更する。
- 作業する際にリソースエディタを使用。
  - XN Resource Editor  
<http://cc.embarcadero.com/item/25783>

### ● 変更手順



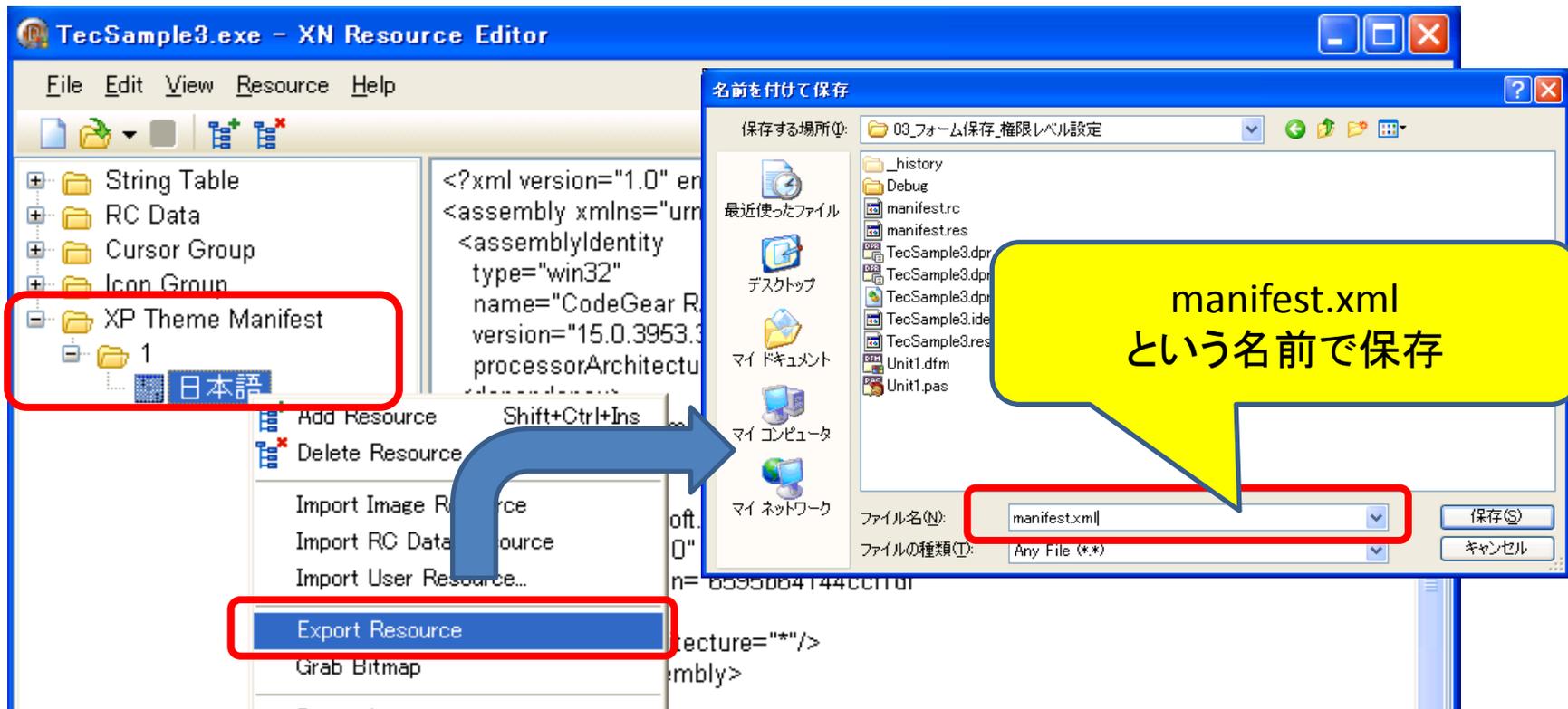
## STEP1: マニフェストを抽出

- プロジェクト⇒オプションより、アプリケーションの『ランタイムテーマを有効にする』にチェックを付けて、プロジェクトをコンパイル。



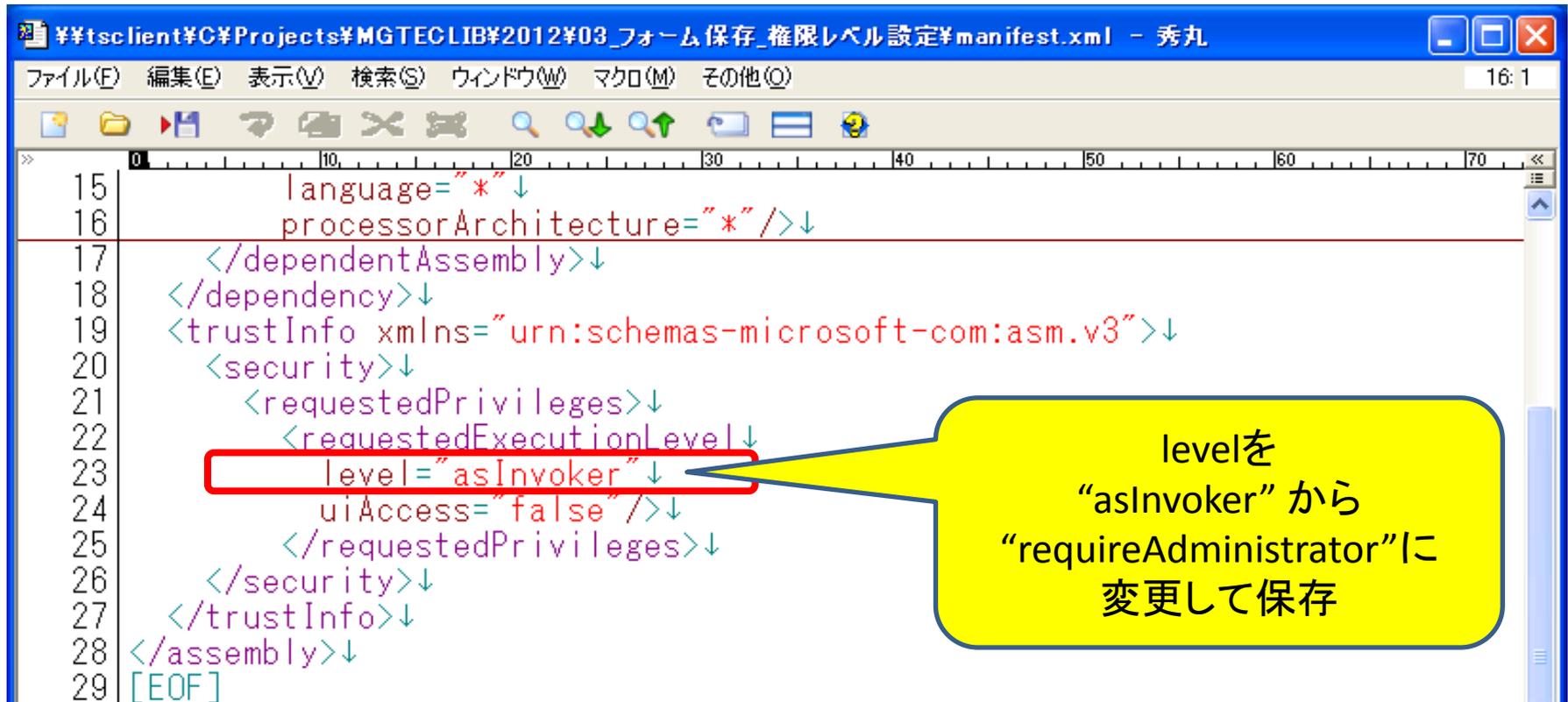
## STEP1: マニフェストを抽出

- 作成されたExeファイルを「XN Resource Editor」で開き、[XP Theme Manifest]⇒[1]⇒[日本語]を選択。右クリックし、[Export Resource]で「manifest.xml」を出力。



## STEP2: マニフェストを編集

- UTF-8形式で保存できるテキストエディタで、「manifest.xml」を開き、[requestedExecutionLevel]タグのlevel値を”asInvoker”から”requireAdministrator”に変更。

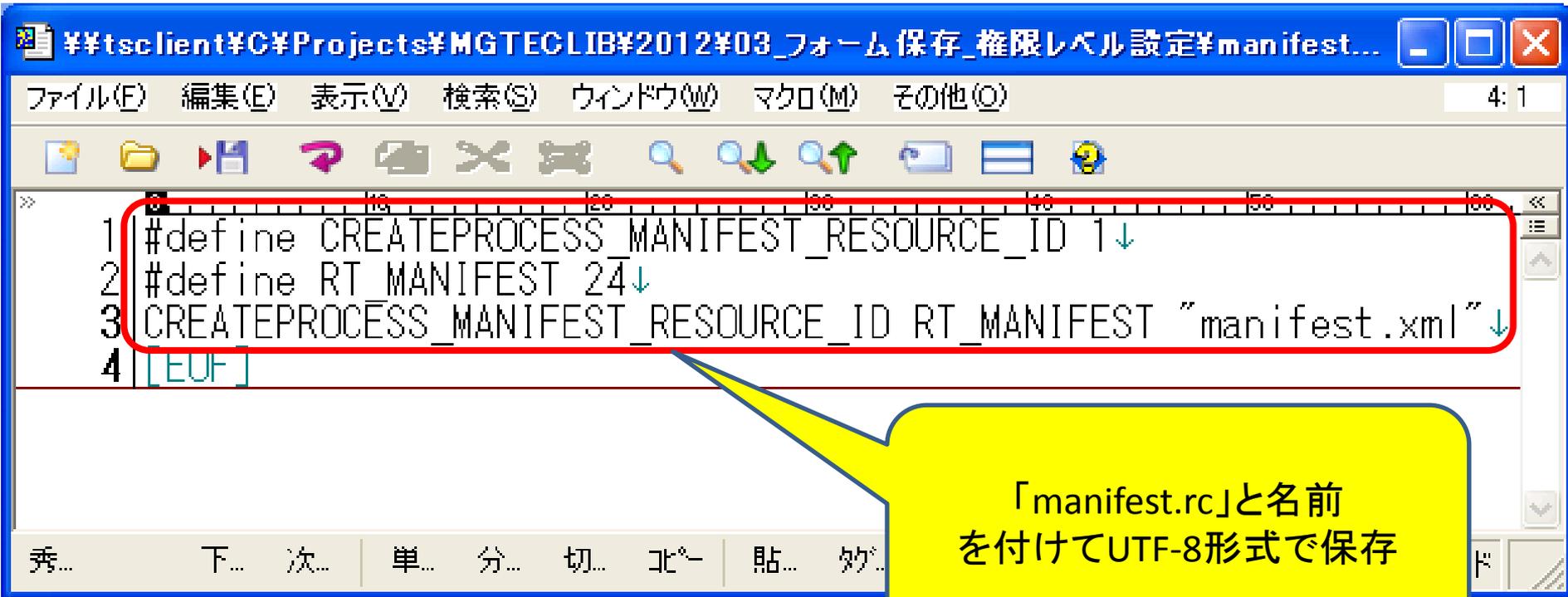


```
15     language="*"↓
16     processorArchitecture="*" />↓
17 </dependentAssembly>↓
18 </dependency>↓
19 <trustInfo xmlns="urn:schemas-microsoft-com:asm.v3">↓
20     <security>↓
21         <requestedPrivileges>↓
22             <requestedExecutionLevel↓
23                 level="asInvoker"↓
24                 uiAccess="false" />↓
25             </requestedPrivileges>↓
26         </security>↓
27     </trustInfo>↓
28 </assembly>↓
29 [EOF]
```

levelを  
“asInvoker” から  
“requireAdministrator”に  
変更して保存

## ■ STEP2: マニフェストを編集

- テキストエディタで、下記入力を行い、「manifest.rc」と名前を付けてUTF-8形式で保存。(リソースファイル作成)

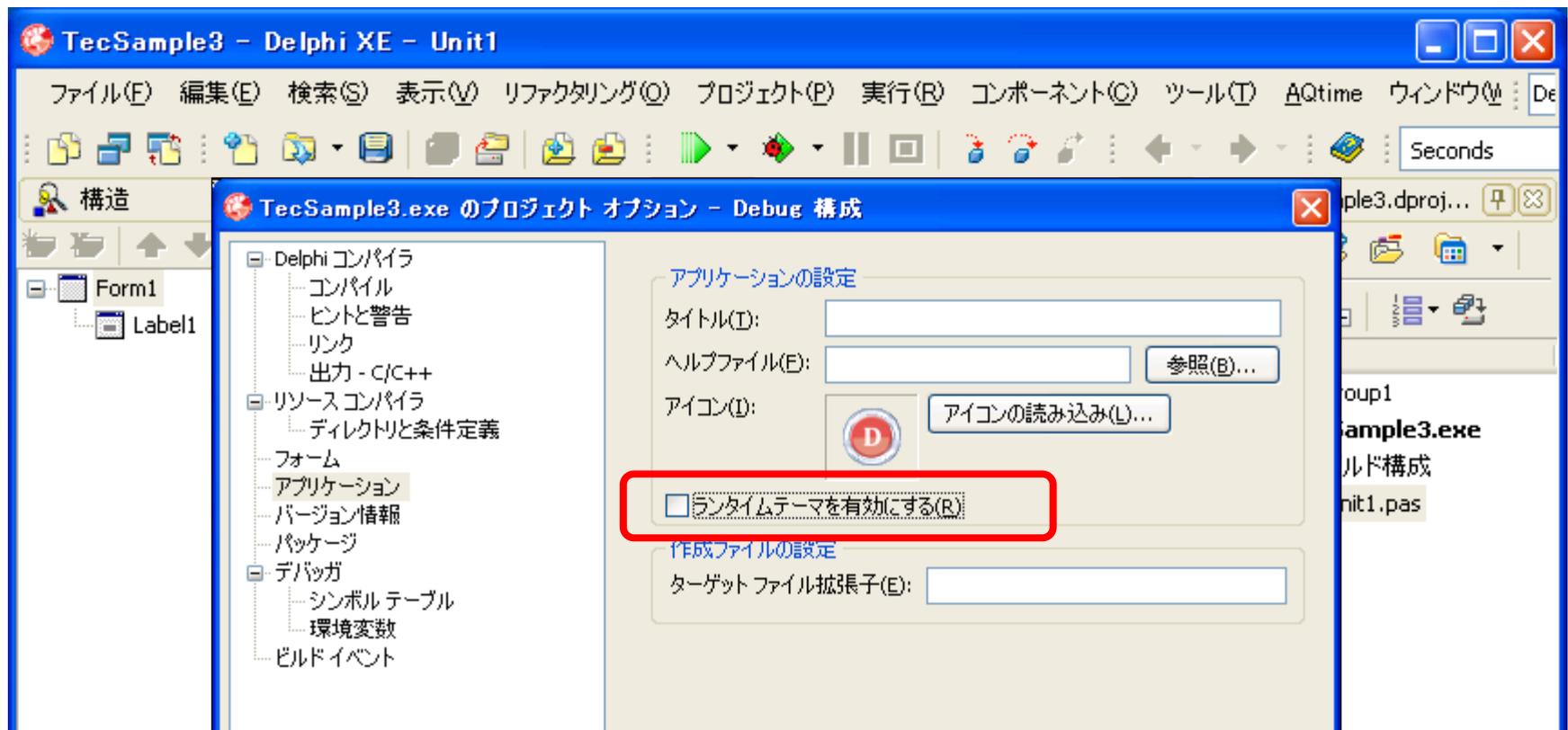


```
1 #define CREATEPROCESS_MANIFEST_RESOURCE_ID 1↓
2 #define RT_MANIFEST 24↓
3 CREATEPROCESS_MANIFEST_RESOURCE_ID RT_MANIFEST "manifest.xml"↓
4 [EOF]
```

「manifest.rc」と名前  
を付けてUTF-8形式で保存

## STEP3: マニフェストの取込、再構築

- プロジェクト⇒オプションより、アプリケーションの『ランタイムテーマを有効にする』のチェックをOFFに変更。



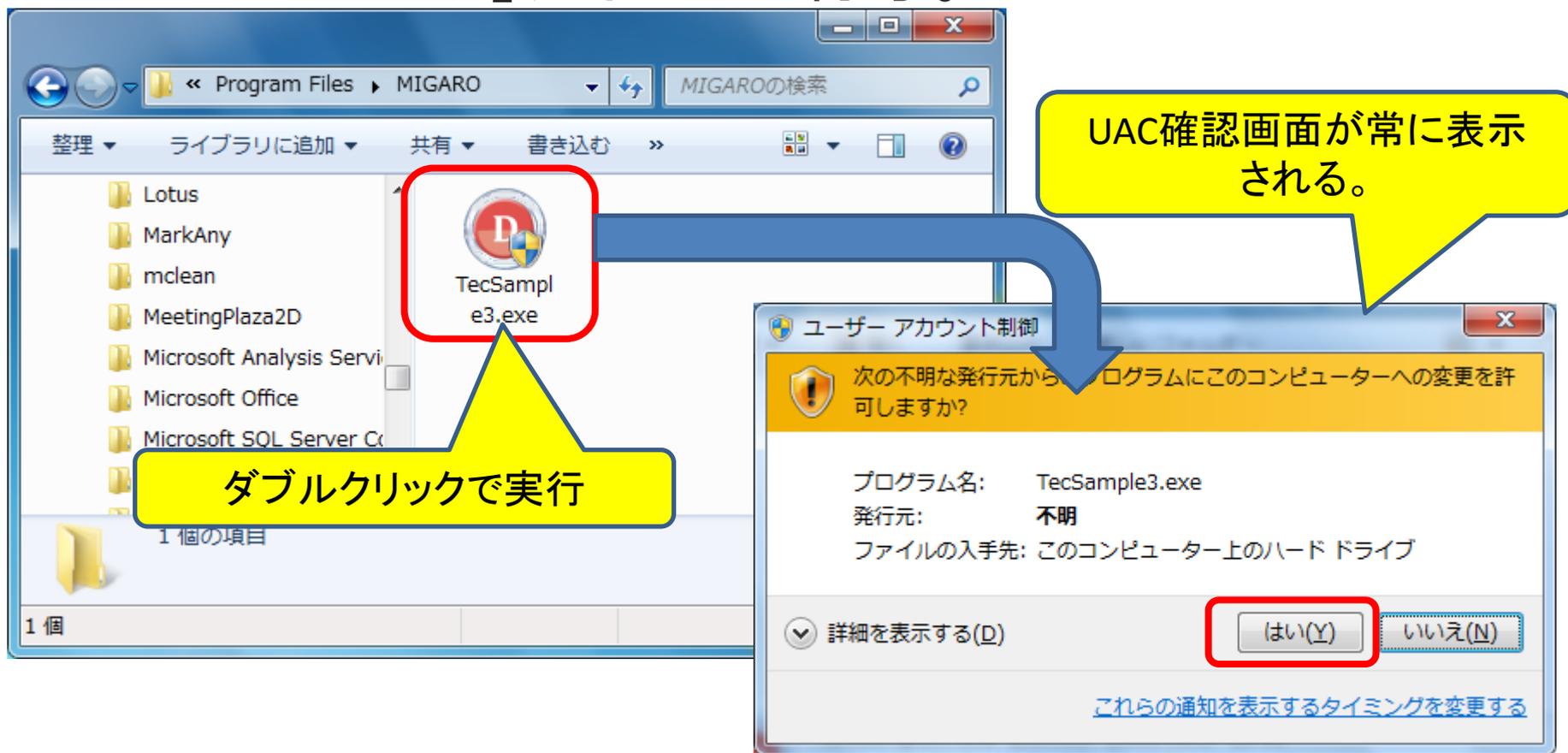
## STEP3: マニフェストの取込、再構築

- プロジェクト⇒プロジェクトに追加より、「manifest.rc」をプロジェクトに追加し、プロジェクトを再構築。

The screenshot illustrates the process of adding a manifest file to a Delphi project. The main window is titled "TecSample3 - Delphi XE - Unit1 [ビルド完了]". The menu bar includes "プロジェクト(P)", and the "プロジェクト(P)" menu is open, with "プロジェクトに追加(A)... Shift+F11" highlighted. A blue arrow points from this menu item to a "プロジェクトに追加" dialog box. In this dialog, the file "manifest.rc" is selected in the file list, and its name is entered in the "ファイル名(N):" field. A yellow callout bubble with the text "「manifest.rc」をプロジェクトに追加" points to the dialog. A red box highlights the "manifest.rc" file name in the dialog. A blue arrow points from the dialog to the "プロジェクトに追加" dialog box. The "プロジェクトに追加" dialog box is open, showing the file "manifest.rc" selected in the file list. A yellow callout bubble with the text "再構築" points to the "再構築" button in the dialog. A red box highlights the "manifest.rc" file name in the dialog. A blue arrow points from the dialog to the "プロジェクトに追加" dialog box. The "プロジェクトに追加" dialog box is open, showing the file "manifest.rc" selected in the file list. A yellow callout bubble with the text "再構築" points to the "再構築" button in the dialog. A red box highlights the "manifest.rc" file name in the dialog. A blue arrow points from the dialog to the "プロジェクトに追加" dialog box.

## ■ 管理者権限要求アプリケーションの完成

- Exeファイルに管理者権限要求を表す「シールド」アイコンが付与。



## (2) BDEアプリケーション

## ■ BDEアプリケーション

- DB2/400へのアクセスのみならず、OracleやSQLServer等へのアクセスでも頻繁に利用。
- Paradox(ローカルデータベース)は、簡易に使用でき便利である。

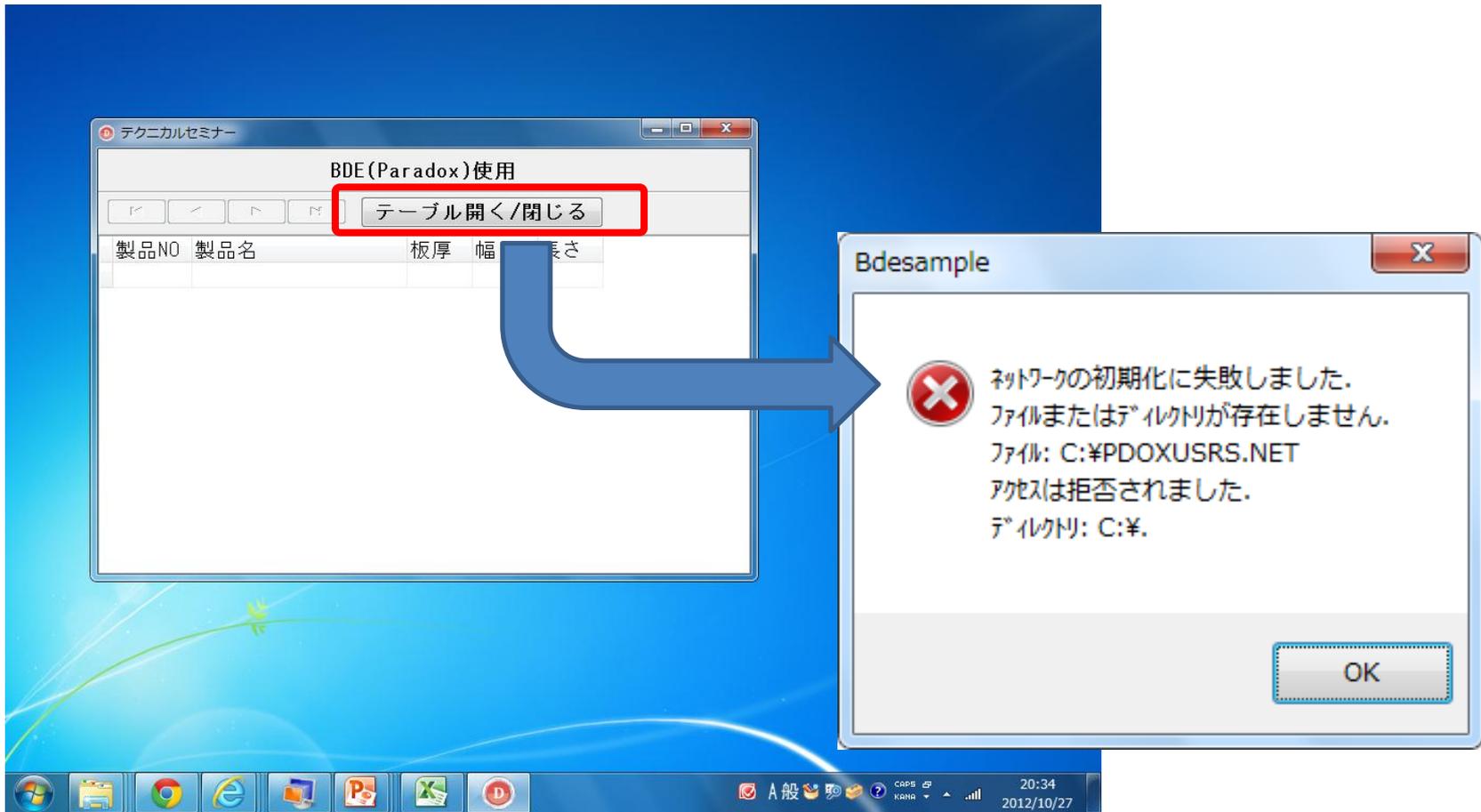
The diagram on the left illustrates the BDE application architecture. It shows a sequence of components: 'Database1.' (represented by a cylinder icon), 'Table1.' (represented by a document icon), and 'DataSource1.' (represented by a server icon). Arrows indicate the flow of data from the database to the table, and from the table to the data source. A red box highlights these three components, and a yellow callout box with a blue arrow points to them, containing the text 'Paradox テーブルを指定' (Specify Paradox table).

The screenshot on the right shows the 'BDE (Paradox) 使用' (BDE (Paradox) Usage) window. The window title is 'テクニカルセミナー' (Technical Seminar). The window contains a table with the following data:

製品NO	製品名	板厚	幅	長さ
▶ SNO01	ミガロ.製品01	10	100	5
SNO02	ミガロ.製品02	10	100	10
SNO03	ミガロ.製品03	10	100	15
SNO04	ミガロ.製品04	10	120	5
SNO05	ミガロ.製品05	10	120	10
SNO06	ミガロ.製品06	10	150	5
SNO07	ミガロ.製品07	10	150	10
SNO08	ミガロ.製品08	20	100	5

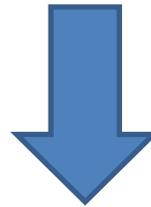
## ■ BDEアプリケーション

- Windows7で実行すると、エラーが発生。



## ■ BDEアプリケーション

- Windows7では、C:¥直下にファイルを書くことができない。
- Paradoxは、通常C:¥直下に”PROXUSRS.NET” (BDEネットワークコントロールファイル)を作成する。



- Session変数のNetFileDirプロパティに書き込み可能なフォルダを指定すれば良い。

# ■ BDEアプリケーション

## ● 実装例

```
procedure TdmMain.DataModuleCreate(Sender: TObject);  
begin  
  //BDEネットワークコントロール保管場所指定  
  Session.NetFileDir := 'C:¥Users¥Public¥Documents¥';  
end;
```

全てのユーザーが使用できる  
パブリックフォルダを指定  
(パブリックドキュメント)

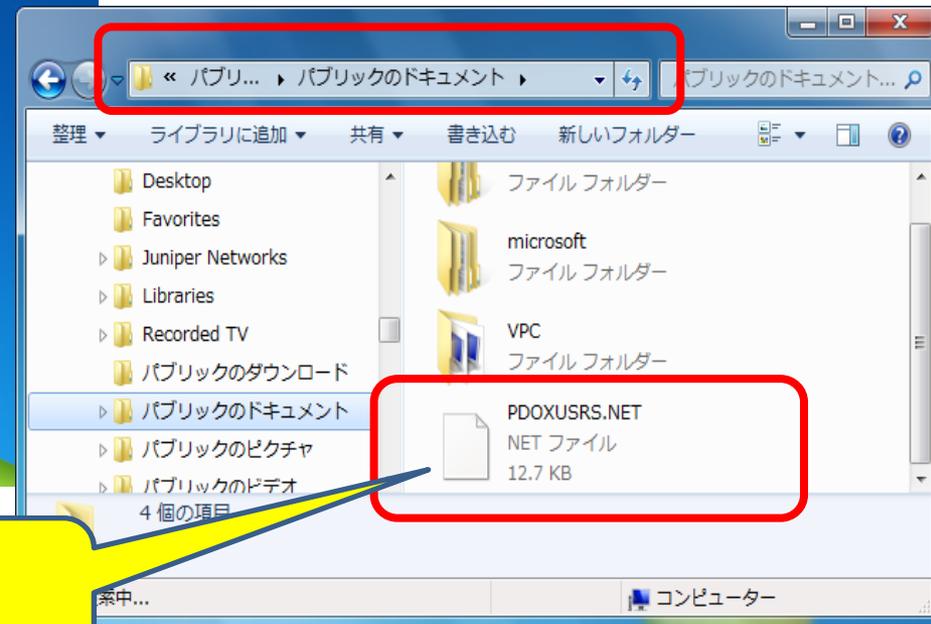


テクニカルセミナー

BDE (Paradox) 使用

テーブル開く/閉じる

製品NO	製品名	板厚	幅	長さ
▶ SN001	ミガロ.製品01	10	100	5
SN002	ミガロ.製品02	10	100	10
SN003	ミガロ.製品03	10	100	15
SN004	ミガロ.製品04	10	120	5
SN005	ミガロ.製品05	10	120	10



パブリックドキュメント  
フォルダにファイルが書き出される

## (3) 特殊フォルダの取扱い

# ■ 特殊フォルダの取扱い

## ● P4-25のソース

```
procedure TForm1.FormDestroy(Sender: TObject);
var
  sPath: String;      // Path
  iniFile: TIniFile; // INI情報
begin
  //保存先にパブリックドキュメントフォルダを指定
  sPath := 'C:¥Users¥Public¥Documents¥';
  //INIファイルアクセスオブジェクト生成
  iniFile := TIniFile.Create(sPath + 'Sample.ini');

  ( ( (以下省略) ) )
```

全てのユーザーが使用できる  
パブリックフォルダを指定  
(パブリックドキュメント)

- Windows7での、[パブリックドキュメント]は確かに  
”C:¥Users¥Public¥Documents”だが、  
WindowsXPでの、[共有ドキュメント]は、  
“C:¥Documents and Settings¥All Users¥Documents”である。  
⇒ フォルダの決め打ちは、危険！

## ■ SHGetSpecialFolderLocation API

- 特殊フォルダをPathを取得するAPI
- ShlObj ユニットに定義
- 特殊フォルダは、CSIDL値という定数で定義

```
function GetCommonDocFolder: String;  
var  
  PID : PItemIDList;  
  pPath: PChar;  
begin  
  //SHGetSpecialFolderLocation APIより情報取得  
  SHGetSpecialFolderLocation(Application.Handle,  
    CSIDL_COMMON_DOCUMENTS, PID);  
  
  GetMem(pPath, MAX_PATH);  
  try  
    //フォルダ名の取得 (末尾に"¥"を付加)  
    SHGetPathFromIDList(PID, pPath);  
    Result := IncludeTrailingPathDelimiter(Trim(pPath));  
  finally  
    FreeMem(pPath);  
  end;  
end;  
end;
```

共有(パブリック)フォルダの  
CSIDL値(定数)は、  
**CSIDL\_COMMON\_DOCUMENTS**

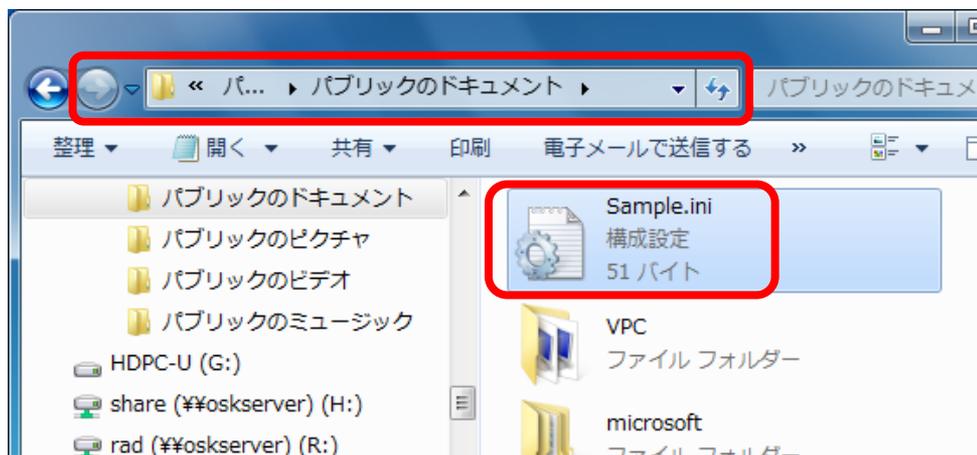
# ■ 特殊フォルダ取得の使用例

## ● P4-25のソースを改良

```
procedure TForm1.FormDestroy(Sender: TObject);  
var  
  sPath: String;      // Path  
  iniFile: TIniFile; // INI情報  
begin  
  //保存先にパブリックドキュメントフォルダを指定  
  sPath := GetCommonDocFolder;  
  //INIファイルアクセスオブジェクト生成  
  iniFile := TIniFile.Create(sPath + 'Sample.ini');  
  
  ( ( (以下省略) ) )
```

全てのユーザーが使用できる  
パブリックフォルダを指定  
(パブリックドキュメント)

GetCommonDocFolder  
関数(P4-44)を使用



# 4. Windows7対応版 Delphi/400 versionXEを使用する メリット

## ■ Delphi/400 Version XEのメリット

- Windows2000～Windows7 と幅広いバージョンでのアプリケーションの動作を正式サポート
- Windows7の新機能がフル活用可能
  - Aero
  - ジェスチャー
  - リボン
  - タスクバー
- RADツールとしての進化
  - VCL for the Web
    - Ajaxに対応し、動的な画面更新が容易に可能
    - コネクションプールを使用したDBセッションが作成可能
  - DataSnap
    - 3層アプリケーションがウィザードで容易に作成可能
  - テクニカルセミナー&テクニカルレポートにて随時 情報公開！

## ■ Aero

### ● Aero効果の使用

#### ■ `Application.MainFormOnTaskBar := True;`

```
program Project1;
uses
  Forms,
  Unit1 in 'Unit1.pas' {Form1};

{$R *.res}

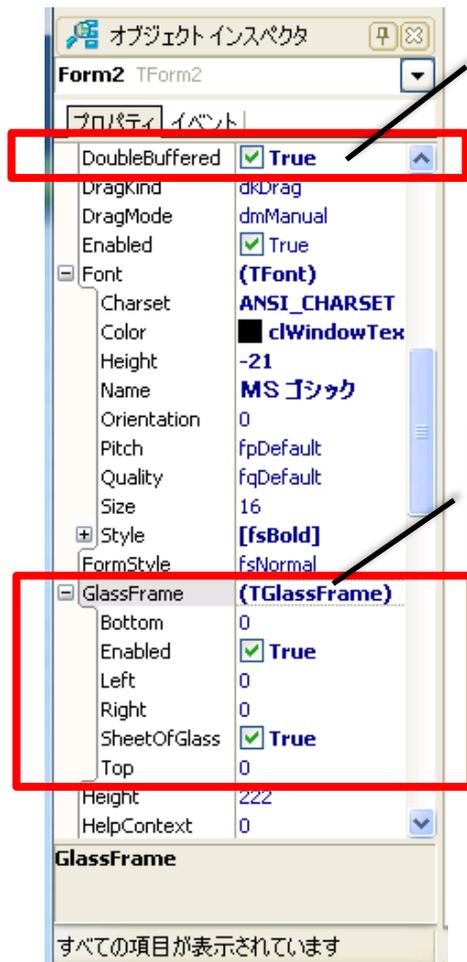
begin
  Application.Initialize;
  Application.MainFormOnTaskbar := True;
  Application.CreateForm(TForm1, Form1);
  Application.Run;
end.
```

新規プロジェクトの場合、  
デフォルトでTrueがセット  
旧バージョンから移行する場  
合、この行を追加する。

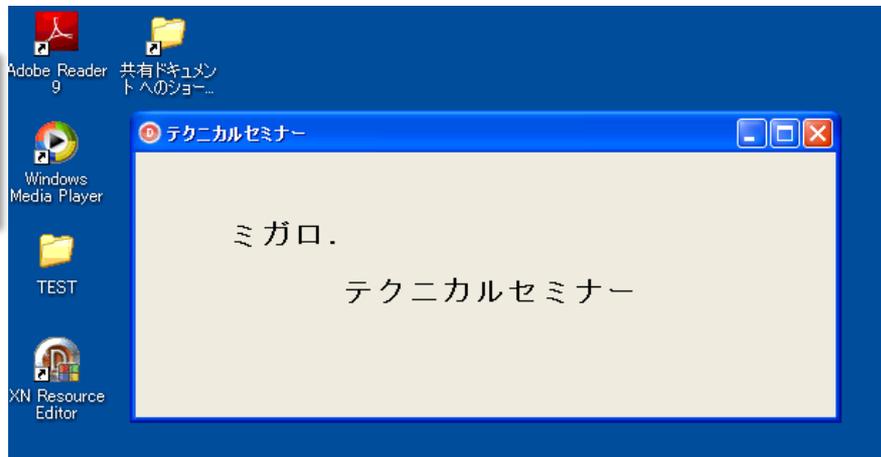
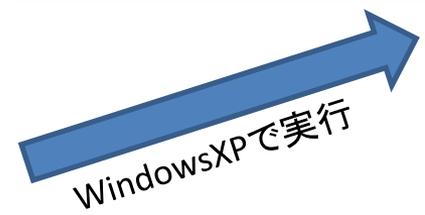
➤ ライブ タスクバーサムネイル、動的ウィンドウ、  
Windows フリップ 等 が利用可能

# ■ Aeroの例(グラスウィンドウ)

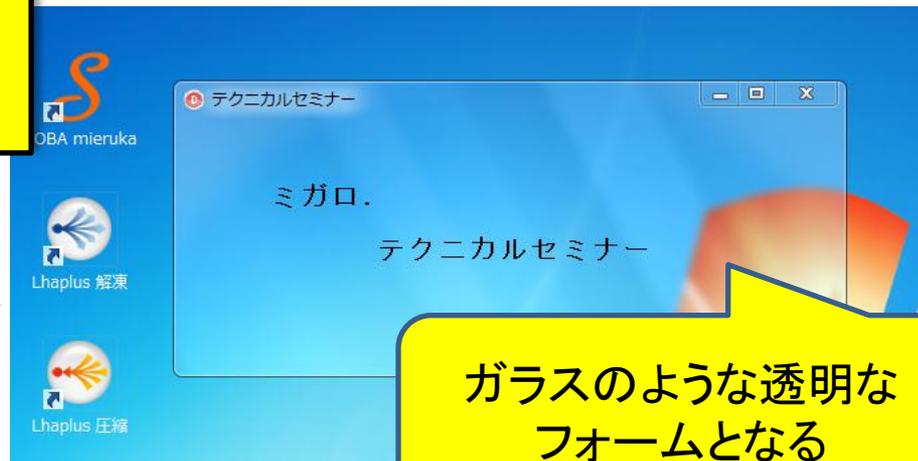
## ● Windowを半透明表示



DoubleBufferedを  
Trueに設定



GlassFrame  
Enabled := True  
SheetOfGlass := True



ガラスのような透明な  
フォームとなる

# ■ ジェスチャー

## ● ジェスチャーマネージャ (TGestureManager)

The image shows a composite screenshot of the Delphi IDE. On the left, a 'Form1' window contains a 'GestureManager1' component. A red box highlights this component, with a blue arrow pointing to the 'カスタム ジェスチャ デザイナ' (Custom Gesture Designer) dialog. This dialog features a 'プロパティ' (Properties) section with '名前(名):' set to '名称未設定' and '敏感度(S):' set to '100%'. Below the properties is a 'ポイント' (Points) list with columns for 'X' and 'Y' coordinates, and a central canvas displaying a blue circular gesture path. A second blue arrow points from the 'GestureManager1' component to the 'オブジェクト インспекタ' (Object Inspector) window. The Object Inspector shows the 'Form1 TForm1' hierarchy with 'Touch' expanded to show 'GestureManager'. A red box highlights the '名称未設定' property, with a tooltip showing 'アクションの新規作成' and '標準アクションの新規作成' options.

➤ 詳細は、ミガロ 第6回テクニカルセミナー『知って得する！ 現役ヘルプデスクが答えるDelphiテクニカルエッセンス6.0』にて紹介

# ■ リボン

## ● リボンコントロール (TRibbon)

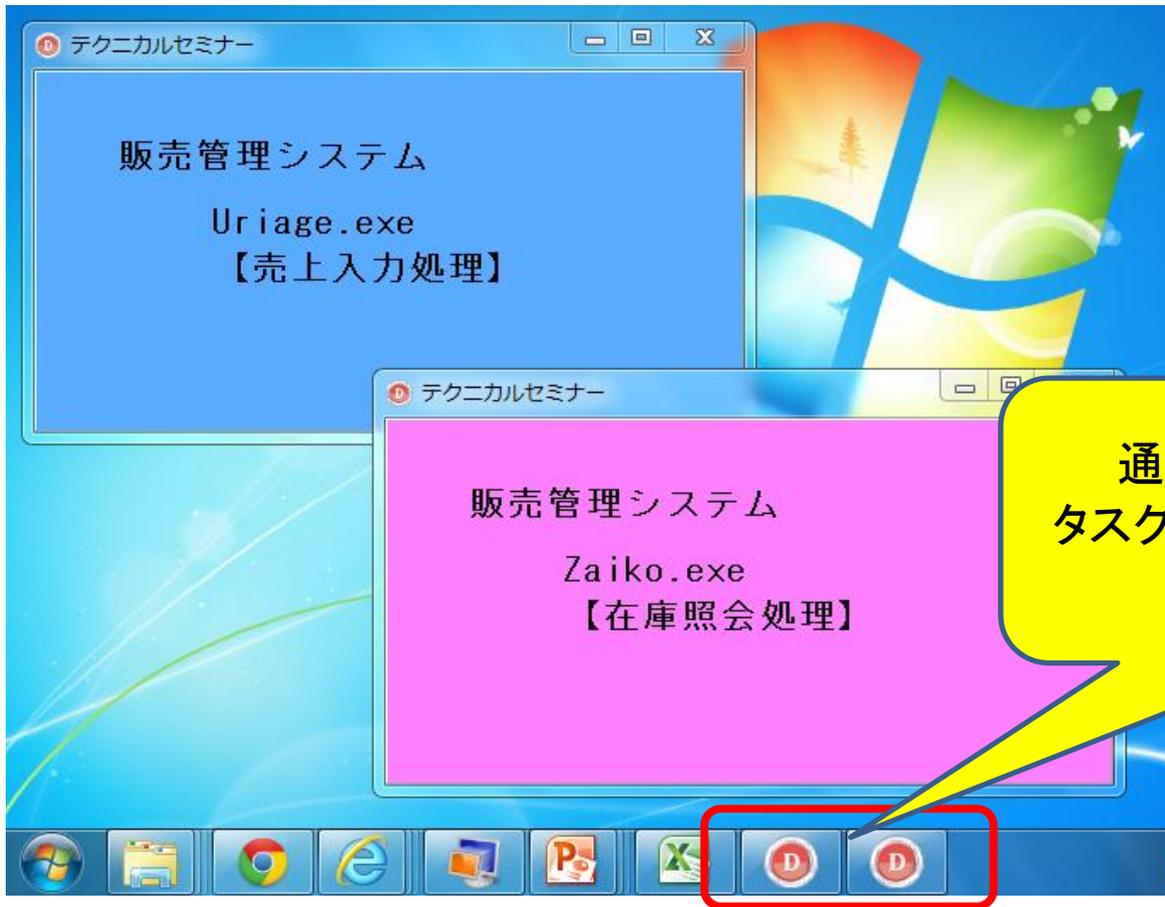
アクションをリボンにドラッグ & ドロップ

TActionManager を使用し、アクションを登録

Delphi XE 付属のサンプルプログラムより

## ■ タスクバー

- 同じ業務アプリケーションが複数EXEの場合



通常Exeが異なるため、  
タスクバーのアイコンが2つに  
分かれる

## ■ タスクバーのグループ化

- SetCurrentProcessExplicitAppUserModelID API
  - タスクをグループ化する為の一意的なIDをセット
    - “CompanyName . ProductName . (SubProduct) . (VersionInformation)”形式
  - 同じIDのプログラムは、全て同じグループとなる
  - ShlObj ユニットに定義

```
uses ShlObj;  
...  
procedure TForm1.FormCreate(Sender: TObject);  
begin  
    //アプリケーションユーザーモデルIDの指定  
    SetCurrentProcessExplicitAppUserModelID('MIGARO.HANBAI');  
end;
```

同じグループのプログラムに  
全て”MIGARO.HANBAI”と  
いうIDを付与

# ■ タスクバーのグループ化

## ● 実行イメージ



# 5. まとめ

## ■ まとめ

### ■ UACへの対応方法

- アプリケーション配置フォルダの工夫
- ユーザーフォルダへのファイル書き出し
- マニフェストの作成

### ■ BDEの対応

- NetFileDirプロパティの設定方法

### ■ 特殊フォルダ

- 特殊フォルダ取得方法

### ■ Delphi/400 ver.XEのメリット

- Windows7新機能のフル活用 (Aeroの例)
- タスクバーのグループ化方法

ご清聴ありがとうございました